

ご注文と一緒にケーキ  
はいかがですか？

七海 碧月

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

木組みとうさぎの町に久しぶりにやって来た桂樹 紅  
彼が働いているお店の近くにはとある喫茶店があった。  
ちよつとした事から色んな事に巻き込まれていく紅であつた！  
気楽に読んで頂ければ幸いです！

8 / 18 追記

何故か短編になっていたので連載に直しました  
操作ミスなのか忘れていたのかは分かりません：

# 目次

第六羽 紅の世界 | 1 |

設定十今後の展開		1
第一羽 ひと目で尋常でないもふもふだ		
と気づかされたよ	1	7
第二羽 ひと目で尋常でないもふもふだ		
と気づかされたよ	2	16
第三羽 紅茶を愛した少年と少年を愛し		
た少女	1	39
第四羽 紅茶を愛した少年と少年を愛し		
た少女	2	50
第五羽 紅茶を愛した少年と少年を愛し		
た少女	3	61
i f 羽 リゼとのクリスマス		75



# 設定十今後の展開

桂樹 紅（けいき こう）

この小説の主人公

ケーキと紅茶のお店『クローリクパヴエ』で働いている

やることは、接客とパティシエ

特にパティシエとしての仕事は親を抜いている

リゼと同じ高校で高2

さらに同じクラスである

アニメ、ゲームが大好きで休みの日はよく新作のゲームを買ったりアニメを見ている

また、銃等の知識もあるのでリゼとは気が合うようだ

好きなもの

ケーキ、紅茶、アニメ、ゲーム

嫌いなもの

グレープフルーツ、幽霊など

キャラの呼び方

チノ チノちゃん

ココア ココア

リゼ リゼ

千夜 千夜

シャロ シャロ

名前の由来はケーキ+紅茶から

実はリゼとチノに好かれているが全く気付いていない

桂樹 みる

主人公の妹

よく店で手伝いをしている

チノ達と同じクラスである

キャラの呼び方

チノ チノちゃん

ココア ココアさん

リゼ リゼさん

千夜 千夜さん

シャロ シャロさん

チノ、マヤ、メグとは凄く仲が良く沢山遊んだりしている  
好きなもの

人の恋ばな、甘いもの

嫌いなもの

辛いもの

みるの由来

ミルクレープから

見た目

けものフレンズのキタキツネ

桂樹 杏（けいき あん）

紅の姉

店で働いている

杏目当てで来る人も居るとか居ないとか

それほどに美人なのだが、重度のブラコン、シスコンである

モカと同じ年で、モフモフするのが大好き

キャラの呼び方

チノ チノちゃん

ココア ココアちゃん

リゼ リゼちゃん

千夜 千夜ちゃん

シヤロ シヤロちゃん

好きなもの

妹、弟、恋愛話

嫌いなもの

苦いもの

名前の由来は杏仁豆腐から

見た目

盾の勇者の成り上がりのサディナ

桂樹 祥（けいき のえる）

紅達の父

クローリクパヴエを経営している

パティシエの資格を持っているが紅の方が上手く、その時は本気で落ち込んでいた

かなりのイケメン

タカヒロさんや、リゼの父とは戦場で知り合った仲

好きなもの

家族、ケーキ

嫌いなもの

戦争

名前の由来はブッシュ・ド・ノエル

クローリクパヴェ

祥が経営しているケーキと紅茶の店

元々は祥の父が経営していたが年をとってしまっただって引退した

その後、祥が引き継いだ

名前の由来はクローリクはロシア語でうさぎ

パヴェエはケーキの名前で意味は石畳

紅のおじいちゃん

クローリクパヴェを開いたが引退

その後は旅をしつつのんびり暮らしている

もしかしたら名前がでてくるかも？

はい、と言うわけでこの度ご注文はうさぎですか？の二次創作を書くことにした、七

海 碧月です

それで、これからの展開ですが、オリジナルやクロスオーバーが入る事が多いと思います

また、二作目なので更新速度がかなり遅くなると思いますが、ご了承ください  
なにか、こんな話をしてほしい！等がありましたらどんどん言ってください  
出来るだけやってみます！

それでは、ご注文と一緒にケーキはいかがですか？をお楽しみ下さいませ  
.....

# 第一羽 ひと目で尋常でないもふもふだと気づかされたよ

コウ「はあー、やっとついた。」

俺は、桂樹 紅 皆からはコウと呼ばれたりしている

今年からこの木組みの街の高校に転入することが決まったのだが。

コウ「つたく、なんで忙しくなってきたから手伝ってくれて今更言うんだよ」と、まあこんな感じで転入することとなり、お店の手伝いもすることになった。

コウ「さーて、とりあえず店に行くか」

ドンツ

??「わっ！」

コウ「あ、すいません！」

??「いいよいいよ！大丈夫だから！」

コウ「そ、そうですか。」

見たところ、俺の一個下くらいかな？

なんか、凄く明るい。

?? 「じゃあねー!」

コウ 「は、はあ。」

初対面の人に「じゃあねとか言うか?」

まあ、そんなことは置いといて、そろそろ。

コウ 「行くか。」

→ 移動中 →

コウ 「あー、やっとついた。」

ここが俺がこれから住み、働くところ

クローリクパヴエだ

姉さんとミルはもう来てるらしいし、さっさと入りますか

ノエル 「いらつしやいませ。なんだ、コウか」

コウ 「なんだとはなんなんだよ?」

このやる気が無さそうな男は俺の父、祥だ

パティシエとして今は働いているらしい

コウ 「姉さん達は?」

ノエル 「今は買い物中だよ、それより早く荷物を上に持っていきな」

コウ「そうだな、手伝いは？」

ノエル「んー、今日はあんまり人が来なさそうだから明日の朝からでいいよ」

コウ「りよーかい」

ノエル「お前の部屋は、三階の角の部屋だ、大きい荷物は運んであるよ」

コウ「分かった」

くコウの部屋く

ふう、全部の荷物は仕舞い終わったかな？

俺の部屋のなか？

ゲームが何個かあって、本棚と机とベッド、後パソコンがあるくらい

クローゼットに服は仕舞ってあるし、あれもケースの中に仕舞ってある

さて、用もないし、なんかするか

ノエル「え？暇だからなんかかない？」

コウ「うん、なんかかないかな？」

ノエル「だったたら、この街を見て回るといい。うさぎがいっぱい居たりするからね

ああ、後お前お昼食べたか？」

コウ「いや、まだだけど、そんなにお腹空いてない」

ノエル「だったら、ちょうどいい、この近くにラビットハウスっていう喫茶店があるからそこで食べるといい」

そこには俺の知り合いと、その娘が居るからな」

コウ「それは覚えてるよ、六年くらいまえにここ来ただろ？」

ノエル「ああ、そう言えばそうだな、じゃ再会してくるといい」

コウ「うん、じゃあ行ってくるよ」

公園にて

やっぱ、変わらないなー

けど、知らない店とかも出来て面白

で、やっぱりうさぎはたくさん居るのな

?? 「うーん・今日も食べないわねえ・うちのあんこはよく食べるのに」

なんだ？うさぎに羊羹!?

普通はうさぎは羊羹を食わないだろうに

でも、あんこは食べるってうさぎなのかな？

?? 「あら？知らない男の人ね」

うん？こつちに近づいて来てないか？

?? 「こんにちは、いい天気ですね」

コウ 「あ、ああ、こんにちは、そうですね。」

普通に話しかけてくるし、あの女の子といい、この街にはこんなのはつきりなのか？

?? 「あ、そうだ！羊羹いります？」

コウ 「え、いいんですか？」

?? 「ええ、この子達が食べなかつたので。」

コウ 「そ、そうですか」

食べたかどうか分かるか分からないけどな。

最悪死ぬかも知れないし。

?? 「あ、私は宇治松 千夜って言います。貴方は？」

コウ 「あ、俺は桂樹 紅って言うんだ」

千夜 「なら、コウくんね。私の家が和菓子のお店やつてるから、良かったら来てね」

そう言って、千夜は割引券をくれた

えーと、甘兔庵？

千夜 「それじゃあ、またねー！」

コウ 「おう、またなー」

元気なやつだったな

さて、移動するか

く道の上にてく

コウ「しつかし、ここ本当に日本か？なんか外国みたいだな」

サイトでここについて調べてみたら、うさぎがたくさんいた！、外国みたいでキレイだった！などが書いてあった

それも領けるくらいだった

コウ「ん？なんかチラシ配ってるけど、なんだろ？」

なんか怯えてる様に見えるんだけど

コウ「すいませーん、そのチラシ」

??「う、うう、うさぎ！ち、ちよつと、来ないでつて！」

コウ「えーと」

なんか片方の目に傷があるうさぎが女の子の近くにいて、女の子がすごい怯えてるんだけど

うさぎ嫌いなのかな？ここ、うさぎ多いから、住みづらいだろうに

コウ「ほら、嫌がつてるだろ。離れてやんな」

そう俺が言うのと、そのうさぎは口にくわえていた葉っぱを吐き出し、何処かへ行つてしまった

コウ「えーと、大丈夫でしたか？」

??「ひや、ひやい!!あ、ありがとうございます!!」

コウ「お、おう・つと、そのチラシもらっていい？」

??「あ、はい。どうぞ」

そう言ってもらったチラシには、フルール・ド・ラパンと言う店名が入っていた

えーと、なにになに

コウ「ハーブティーのお店なんだ」

??「そうです、色んな種類があるので、是非来てください!」

コウ「おう、機会があつたらな」

そして、その場を後にした

くラビットハウス前く

もう、こんな時間か・いい時間帯だな

カランコロン

??「い、いらつしやいませ」

あー、懐かしい。覚えてないかな?

とりあえず、窓側のテーブル席に座った

?? 「ご注文は。」

コウ 「えーと、それじゃあ、サンドイッチとオリジナルブレンドで」

?? 「かしこまりました」

そして、コーヒーのいい匂いがしてきた  
しばらくして

?? 「コーヒーと、サンドイッチです。」

コウ 「うん、ありがとう」

まずは、コーヒーを一口飲んでみた

コウ 「うん」 ?

?? 「ど、どうでしょうか。」

コウ 「いい味だね、チノちゃん」

チノ 「!!」

お、やつと分かったかな？

チノ 「もしかして、コウさんですか？」

コウ 「うん、そうだよ。久しぶり！」

チノ 「は、はい。お久しぶりです」

コウ 「そんなに堅くならなくても良いのにー」

チノ「べ、別に堅くならうとしてるわけじゃ、ないです」

コウ「そうか」

そして、サンドイッチを食べる

コウ「うん、美味し」

チノ「良かったです」

その時、また誰が入ってきた

あれは、駅でぶつかった子か？ここでも会うのか

その子は机の下などをのぞきこみ

??「うさぎが、うさぎが居ない！」

おいおい、さすがにそんなところには居ないだろ

あつ・チノちゃんの上にアングラ？うさぎが乗ってたけど、うさぎが沢山居る

からな、この街には

見る、チノちゃんになんだこのお客さん、みたいな目で見られてるぞ

# 第二羽 ひと目で尋常でないもふもふだと気づかされたよ — 2 —

前回のあらすじ！

前回見た方が早いけど…

ラビットハウスに来たお客様！

意外！それは今朝ぶつかった女の子だった！

終わり

………なんかメタイものがあつたような…

まあ、良いか

それにしても…すごい偶然だなあ

この子もおんなじ所にくるって

ん？何か俺に近づいてくる…？

??「ここ、座っていい？」

コウ「あ、ああ。どうぞ」

?? 「ありがとう！」

いやいや…全然他のところ空いてるよね？

この子凄いアクティブだな

駅でもこんな感じだったっけ…

?? 「私は保登 心愛（ほと ここあ）だよ。

あなたの名前は？」

コウ 「俺は、桂樹 紅だ。駅でも会ったよな、よろしく」

ココア 「うん、よろしく！」

そこへチノちゃんがやって来た

ココア、なんかアンゴラウサギ見つめてるな…

ココア 「モジャモジャ？」

おい、モジャモジャって…

間違っちゃいけないけどその言い方ってどうなんだ…？

チノ 「これですか？これはティッピーです。一応ウサギです」

ココア 「へー」

チノ 「あの、ご注文は」

ココア「じゃあ、そのウサギさん！」

チノ「非売品です」

ココア「う、ううっ…せ、せめて、せめてもふもふだけさせて!!」

チノ「コーヒー一杯で一回です」

ココア「じゃあ、三杯！」

コウ「おい、そんなに飲んで大丈夫か？」

チノ「ちゃんもビツクリしてるよ」

ココア「大丈夫だよ！多分…」

コウ「多分かよ」

チノ「お待たせしました」

チノ「ちゃんがコーヒーを持ってきた」

ココア「コーヒー三杯たのんだから、三回もふもふする権利を手に入れたよ！」

チノ「冷める前に飲んでください」

そりや「そうだよなあ…」

で、ココア三杯飲んだんだけど…

銘柄全部ハズレてたよ

インスタントはねえよ…

ココア「もふもふだあー」

コウ「おい、顔」

ココア「ハッ！いけない、ヨダレが…」

「ノーーーーー！！」

!?い、今こいつ喋らなかったか!?

て、言うかこの声どつかで…

「ええい！いい加減に離せ!!」

ココア「な、なんか凄いダンディーな声で拒絶されたんだけど!？」

コウ「あ、ああ。俺も聞こえたぞ」

チノ「私の腹話術です」

コウ・ココア「「え!？」」

腹話術、な訳無いよなあ…

つか、こここのじつちゃんの声っぽかったぞ

どっかに居るのか？

ココアは、下宿先を探しているらしい

ココア「ねえ、香風さんって知ってる？」

ん？香風って確か：

チノ「香風はうちです」

ココア「本当!?!これは偶然を通り越して運命だよ!!」

コウ「そうかもな。運命は言い過ぎだと思いがな」

ココア「そう言えば、コウ君のお家は？」

コウ「俺は、この道を行つたところのクロリークパヴェつて所だよ」

ココア「へー」

チノ「あ、そこならよくコーヒーゼリーとかケーキとか持つてきてもらつてます」

コウ「そうか、なら俺が来るかもな」

チノ「そうですね」

で、ココアが手伝いしようとしてたけどチノちゃんに断られてた

ココア「ねえ、チノちゃんとコウ君ってどんな関係なの？」

コウ「ん？昔来て知り合つたんだよ。そう言えば、じつちゃんは？」

チノ「祖父は去年…」

コウ「そうか…大変だな」

チノ「いえ、父も居ますしバイトの人も一人…」

ココア「それなら！私をお姉ちゃんだと思つて頼つてね！だからお姉ちゃんつて呼んで？」

コウ「おい、ココア…」

チノ「ココアさん…」

ココア「お姉ちゃんつて呼んで！」

チノ「ココアさん、仕事をしてください」

ココア「任せて♪」

コウ「大丈夫かよ…」

コウ「ズズズ

ティツピー…」

こいつ…どうしても気になるな…

一回試してみるか！

コウ「もふもふ

ティツピー…」

コウ「こちよこちよ

ティツピー「おい、やめんか！」

コウ「やつと喋ったな！」

ティツピー「!? 図ったな！」

コウ「悪いな、でもこうしないと喋らなかつたと思うし

で、何でそうなんだ？」

ティツピー「知らん、だが死んだと思つたらこうなつておつた

これを知つてるのはチノとタカヒロとノエルだけだからな…多分…」

コウ「おい、多分って…」

にしても、どうなの？ウサギの体って」

ティツピー「うむ…冬は暖かいんだが、夏は暑苦しくて堪らん

それに、ココアのような人がたまに抱きついたり撫でてくるからな…」

コウ「内心喜んでるんじゃないの？」

ティツピー「バカ言え、なつてみれば分かるぞ？」

コウ「遠慮しとくよ」

キャアアアア…

え？ココアの悲鳴!?

コウ「行くぞ」

ティツピー「おい、年寄りをいたわらんか！」

コウ「よく言うよ、年寄り扱いするとか怒る癖に…」

コウ「ここか…」

ティツピー「気を付けろよ？」

コウ「強盗かも知れないぞ？」

ティツピー「!?」ガタツ!

あ、反応した。やっぱり嫌なのか

コウ「おい、ココア!大丈夫か!？」

そこには、下着姿で拳銃を構えている女の子が…

あつ、やべ

??「きやあああああああ!」

コウ「あ、ごめんなさい!つてガツ！」

か、格闘技強…

??「フウ…ん?お、おい大丈夫か？」

コウ「」気絶

??「…やべっ」

……んあ？

…そうだ、お決まりのネタを…

知らない天井だ…

チノ「あ、目が覚めましたか？」

コウ「あ、ああ。なあ、何があつたんだ？」

チノ「え、覚えて無いですか？」

コウ「お、おう…ココアの悲鳴が聞こえてそれで…」

うーん、思い出せん。いつたいなにがあつたんだ？

チノ「…覚えてない方が良くも知れませんか…」

コウ「え、なにそれ怖い」

??「おい！アイツは起きたか!？」

コウ「？なんだ？」

知らない紫色のツインテールの女の子がドアを開けて来た

??「さつきは、本当にすまなかった！」

コウ「え!?!で、でも俺もなんかしたみたいだしこつちこそすいませんでした!」

??「いや、こつちこそ」

コウ「いやいや、こっちこそ」

チノ（いつまで続くんだろう…これ…）

??「わ、分かった。今回の事はもう忘れよう！で、今日少し手伝ってもらおうでいいな  
!？」

コウ「お、おう。いいぞ」

結局、十分くらい言い争ってた。

けど俺、何してたんだろう…？

何か、思い出してはいけないような…

チノ「紹介してませんね。こちらはリゼさんです」

リゼ「よ、宜しくな」

チノ「では、リゼさん。ココアさんとコウさんに仕事を教えて下さい」

リゼ「！教官という事だな」

コウ「どうしてそうなる」

チノ「なんだか嬉しそうですね」

リゼ「この顔の何処がそう見える」

コウ「全体的に」

ココア「これから宜しくね！リゼちゃん！」

リゼ「上司に口をきく時は、言葉の最後にサーを付ける！」

ココア「お、落ち着いて！サー！」

おい、サーで良いのか。ママじゃねえのかよ

まあ、ここはノツてやろう

コウ「Yes, sir!!」メツチャ発音良く

リゼ・ココア・チノ「!!?!」

なんかスゲエびつくりされた、解せぬ（——；）

リゼ「よし、このコーヒー豆を運ぶぞ」

コウ「よし…結構重いけどこのくらいなら…」

ココア「ほ、本当だ…普通の女の子じゃむりだよ…」

リゼ「?!そ、そうだな！普通の女の子には難しいな！」

おい、今完全に持ってたよな？

何でそんなに慌てるんだ？

ココア「じゃあ、この小さいのを…」

コウ「気を付けろよ？」

ココア「う、うん。これも、結構重たい…一つしか持てないよ」

リゼ「！そ、そうだな。一つしか持てないな！」

…そんなに普通の女の子がいいか…

別に良いと思うけど…

リゼ「ココア、メニュー覚えておけよ？」

ココア「うわー、凄い！メニュー沢山あるねー

覚えるのが大変そう…」

リゼ「そうか？私は一目で覚えたが…？」

コウ「まじか、凄いな」

リゼ「訓練されているからな！」

コウ「いや、どんな訓練だよ…」

リゼ「それだったらチノの方が凄いぞ？匂いだけでコーヒーの銘柄が分かるからな」

ココア「本当!？」

リゼ「但し砂糖とミルクは必須だ」

チノ「」／／／

ココア「なんか今日一番安心したー！」

コウ「実家のような安心感だな」

チノちゃん可愛いところあるんだなあ…

それにしても…

ココア「あゝあ、私にも何か特技があればいいのに」

コウ「俺も…そう言うの一つも無いからな」

ココア「あれ？チノちゃん何してるの？」

チノ「これですか？学校の宿題です。空いた時間に少しずつやってるんです」

コウ「へえー」

ココア「あ、その答えは270で隣は486だよ」

リゼ「!?な、なあココア430円のコーヒーを29杯頼むといくらだ？」

ココア「?12470円だよ？」

リゼ「こ、こいつ意外な特技を…」

ココア「あゝあ、私にも何か特技ないかなー」

コウ「しかも自覚無しかよ」

リゼ「なあ、コウは何か特技無いか？」

コウ「んー…FPSの全国大会の決勝行ったとかケーキを作って見たりしたら親父が

数日寝込んだとかかな…」

リゼ「え？」

コウ「特に凄く無いだろ？だからココアとかみたいに特技があったらなーって」  
リゼ「お前も大概だと思っただが…」

ココア「なに作ってるの？」

リゼ「ラテアートだよ」

コウ「うお、凄いな」

リゼ「そ、そうか？」

ココア「うん！ねえ、作り方教えて？」

リゼ「しょ、しようがないな…見てろよ？」

そういつてリゼはものすごい速さでラテアートを作り始めた  
めっちゃ速い！つか、こ、これは…！

コウ「テイ、ティージャー!?!」

リゼ「お、知ってるのか」

コウ「一応な、ゲームとかも良くやるし」

リゼ「そうか、なら今度一緒にやらないか？」

コウ「良いぞ、うち来いよ」

チノ「それってどうなんですか？」

コウ「？」

ココア「よし、やってみよう！私、絵は得意なんだよ！賞もらったこともあるんだ  
！」

リゼ「小学校低学年の部とかは無しな」

ココア「…」ビクッ

コウ「やっぱりか…」

で、出来上がりは…

コウ「いいんじゃないか？これから練習すれば上手くなるだろ」

リゼ「そうだな、コウもやってみろよ」

コウ「俺は…遠慮しとくよ…」

俺、絵は絶望的に下手だからな…

妹になにこれ？って言われたときと言ったらもう…

ココア「チノちゃんもやってみて！」

チノ「私ですか…？分かりました」

チノ「出来ました」

ココア「こ、これは」

コウ「凄い…」

なんとチノちゃん、ピカソみたいな絵を描いていた

いやー凄いな、俺には良くわからんが見る人が見れば凄く評価されるんじゃない？

ココア「チノちゃん！仲間だね！」

コウ「違うと思う」

ココア「ねえチノちゃん、ここラビットハウスでしょ？うさみみ着けないの？」

チノ「うさみみなんて着けたら違う店になってしまいます」

ココア「リゼちゃんとかうさみみ似合いそうなのに…」

リゼのうさみみか…

結構似合う気がする

リゼ「ろ、露出度高過ぎるだろ！」

コウ「なにを考えたんだ!？」

ココア「じゃあ、なんでラビットハウスなんですか？サー！」

リゼ「そりゃ、ここのマスコットがティツピーだからだろ」

ココア「え!?ウサギだったの!？」

コウ「知らなかったのかよ」

リゼ「じゃあ、ココアはなんて店名にすればいいと思うんだ？」

ココア「ズバリもふもふ喫茶！」

リゼ「それこそ違う店になるだろ」

コウ「でも、リゼチノちゃん見てみ」

リゼ「ん？」

チノ「もふもふ喫茶…！」キラキラ

リゼ「気に入ったのか!？」

いいんじゃないか？もふもふ喫茶…

ふう、終わったー！

コウ「お疲れ様ー！」

ココア「うん、大変だったねー」

チノ「ココアさん、あんまり仕事しないでしよう」

ココア「うっ…」

コウ「まあ、初日だから、ゆっくり慣れていけばいいんじゃないか？」

ココア「そうだね！じゃあ、またねー！」

コウ・リゼ「じゃあなー！」

クローリクパヴエにて：

コウ「ふー、大変だったなー」

俺は今、パソコンを操作していた

ピロリン！

コウ「ん？ココアからか：一体なんだ？」

そこには、俺たち五人の絵が描いてあるラテアートが写っていた

コウ「へえ、ここまで上手くなったか：保存しとこ」

さて、あの人たちは居るかな？

—兎の小隊長がログインしました—

兎の小隊長

こんばんは—

U M R

久しぶりね小隊長

イケニート

そろそろこのアカウント変えたいんだが？

閃光の舞姫

ダメですよ、ご主人！私だってこれなんですから

兎の小隊長

俺だってこれだぞ、しばらくこのままにしとけ

イケニート

ソナー（ ; w ; ）

U M R

そんな顔したってダメですよ w

兎の小隊長

ダメダ！

コノハ

ねえ、それよりいつやる？

兎の小隊長

イベントがそろそろあるからそのへんは？

イケニート

小隊長待ちだった

兎の小隊長

じゃ、一人連れてきていいか？

U M R

おけです

閃光の舞姫

おーけーです！

イケニート

おけ

コノハ

おけだよ

兎の小隊長

皆仲良いな W W

イケニート

こんなもんだろ？

閃光の舞姫

そうですよ w w

兎の小隊長

そういやアーケードの大会があるっぽくてさ、来る？

イケニート

小隊長の住んでるところってどこだっけ？

兎の小隊長

ウサギと木組みの街って言ったじゃん w

閃光の舞姫

記憶力大丈夫ですか？ w w w

コノハ

僕行ったことあるけどキレイな街だよ

兎の小隊長

つか、だからこのアカウント名になったんだろ

U M R

珍しいわね、小隊長から誘うなんて

兎の小隊長

何となくだな、日程はまた追々

イケニート

分かった

閃光の舞姫

ご主人基本的に暇ですからねww

イケニート

うっせえ！俺だつてバイト始めたりしてんだよ！

兎の小隊長

進歩したねえww

イケニート

小隊長まで…勘弁してくれ…

兎の小隊長

とりあえず、俺は忙しいから落ちる

UMR

お疲れ様

閃光の舞姫

お疲れ様です！

コノハ

またね

イケニート

おう、それじゃ

兎の小隊長

それでは：

万歳ああああああああい！

—兎の小隊長がログアウトしました—

さて、寝よう

## 第三羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女

— 1 —

コウ「あー、今日から学校か…」

と言うわけで、今日から学校である。

んで、凄く憂鬱なのは休みが終わってしまったからではなく…

コウ「何でこの制服なんだよ…っ！」

第三羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女 — 1 —

話をしよう。

あれはつい昨日の出来事だ…

コウ「なあ、親父」

ノエル「ん？なんだ？」

コウ「俺が行く高校どこ？」

ノエル「ああ、言つて無かつたつけ？」

「ここだよ、ここ」

コウ「なあ、親父？」

ノエル「ん？なんだ？」

コウ「ここ、女子校じゃね？」

ノエル「いや、今共学にするために新しく転校生とか新入生を呼んでるんだと」

コウ「ここに俺が行くとか…ないよな？」

ノエル「諦めろ、一応男は居るらしいから」

コウ「……………ふん！」

ノエル「ぎやあああああああ！」

ー回想終わりー

というわけなんだがな…

嫌だなあ、あそこお嬢様校だつて有名だんだんだけ！?

絶対、

「おーっほっほっほ！何でここに庶民がいますの？」

とか言われるじゃん！（偏見）

コンコン

んあ？もうこんな時間か：

?? 「お兄ちゃん：起きてる？」

!?!ちよ、その言い方は某ヤンデレみたいだからやめろ：

一時期それでトラウマになったからな!?! (実話)

?? 「：：？」

コウ「あ、ああ。起きてるよ。」

?? 「なら早く起きて来なよ：：？」

コウ「おう、分かった」

今のは、俺の妹のみる

いつもくてーつとしてるし、ゲームばかりしてる

後、金髪

うちの姉妹はギャップつーかキャラが濃いなあ：

コウ「おはよ：：」

ノエル「よう、おはよう。」

今日から、学校だっけか？」

コウ「そうだよ…たく、なんでそんなところに入れることに…」

ノエル「相談したらなんか入れてくれることになった」

コウ「グレートですよ、そいつあ…」

コウ「そう言えば、みるも今日から学校だっけ？」

みる「うん…楽しみ…」

コウ「全然そんな風には見えないんだが…」

「そういや、杏姉さんはまだ起きてないのか？」

みる「うん、でも多分そろそろ来る…」

コウ「え？」

??「コウッ！みるー！おっはよーー！」トビツキ

みる「ん…」ガードベント

コウ「うわあああああああ!!!」

ノエル「にぎやかだなあー」ノンビリ

コウ「そんなん言ってる場合か!!」

コウ「だからさ、急に飛び付くなっていつも言ってるよね？」

本気で危ないからやめてほしいんだけど？」

?? 「は、はい…」 ショボン

この、姉…もとい、ブラコンとシスコンを混ぜちゃった様なのは俺の姉の杏である。

黙っていりや弟の俺でも美人だと思ってくらいなのに…

コウ「とにかく！もう飛び付くのは止めてくれ、いいな？」

杏「はい、とここでコウちゃん？」

コウ「なんだよ…？」

杏「そろそろ学校いかなくていいの？」

みる「ぼくもそろそろ行かなくちゃ…」

コウ「やつべ！そろそろ行かねば!!」

流石に初日から遅刻はしたくない！

杏「急ぎなさいよ」

コウ「誰のせいだとおもってたんだ!？」

みる「ほら…行くよ…？」

コウ「だーっ！分かってるって!!」

それじゃ、行ってきまーす」

ノエル 杏「「いつてらっしやーい」」

く登校中……

はあ…初日の朝から疲れた…

みる「?どうしたの…?」

コウ「もう疲れたんだよ…」

みる「おねえちゃん、いつも元気だから…」

コウ「元気過ぎると思うぞ?あれは」

そーいや、お姉ちゃん(自称)がいたな…

アイツは…

ココア「あっ!コウくん!」

コウ「お、噂をすれば」

ココア「なんのこと?」

コウ「気にすんな」

チノ「おはようございます、コウさん」

コウ「よ、チノちゃん。おはよう」

みる「この人たちは…？」

コウ「ああ、そう言えばお前知らないっけ？」

みる「うん…」

ココア「私はココアだよ！よろしく！」

チノ「チノです、よろしくお願いします」

みる「ぼくは、みる。よろしく…」

コウ「そういえば、チノちゃんとみるって同じ年なんだよな。」

チノ「そうですね。制服も同じなので学校も同じですかね？」

みる「うん…そうみたい…」

コウ「一緒のクラスになれたらいいな」

みる「うん…チノちゃん、よろしくね…」

チノ「よろしくお願いします、みるさん」

コウ「じゃ、俺はこっちだけ…」

ココア「私たちは、こっちだよ！」

コウ「そうか、なら頑張れよ、みる」

みる「うん…頑張る…」

ココア「じゃあねー!」

コウ「じゃあな」

ーしばらくして…ー

ん? あれは…リゼか?

しかも、おんなじような制服だから…学校同じか?

コウ「よう、リゼ。どうしたんだ?」

リゼ「私は…異次元にでも迷いこんでしまったのかもしれない…」

コウ「いきなりどうした!」

ーかくかくしかじか…ー

なるほど、ココアに何回も会って混乱したのか…

つーか、それ

コウ「あいつが迷子になってるだけじゃね?」

リゼ「そ、そうか」

さつき別れたばかりなのに何してるんだか…

コウ「そう言えば、リゼ」

リゼ「ん？どうした？」

コウ「俺と同じ制服だよな？もしかして高校同じだったりする？」

リゼ「多分そうじゃないか？でも、男子が来るなんて聞いてないぞ…」

コウ「なんか今年からの取り組みらしい」

リゼ「そうなのか」

コウ「ちなみに、何年生なんだ？」

リゼ「二年生だよ」

コウ「なら、俺と同じか…」

リゼ「同じクラスになったりしてな」

コウ「はっはー、流石にそれは…」

…ありそうだなあ

つか、結構仲は良いから

コウ「別に同じクラスでもいいかも shouldn't」

リゼ「な、何を言ってるんだ。バカー!!」／／／

コウ「ギャース！」

いてえ…

まあ、変なこと言った俺も俺なんだけどな…

さて、そろそろ学校かな？

?? 「き、きやあああああああ！」

リゼ 「!? どうしたんだ！」

コウ 「向こうから聞こえてきたぞ！」

リゼ 「おい、大丈夫か!？」

コウ 「つて、これは…」

?? 「カタカタカタ

リゼ コウ 「ウサギ…だよな…?」「

リゼ 「全く…また邪魔してるな? こいつ…

ほら、怖がつてるだろ? あっち行け」

ウサギ 「ペッ

はあ…ビツクリしたな…

つてか、この子フルールド・ラパンのチラシ配ってた子じゃないか?

リゼ「おい、大丈夫か？」

??「は、はいっ！大丈夫です！」

リゼ「そうか、名前は何て言うんだ？」

??「桐間 シャロです！」

リゼ「そうか、私はリゼ。んで、この存在感がなかったやつはコウだ」

コウ「ふざけんな、誰が存在無いんだよ

まあ……とりあえずよろしく。そう言えば、この前チラシ貰ったよね？」

シャロ「そ、そうですね！あのときは本当にありがとうございました！」

コウ「大丈夫だよ。ところで、君も同じ制服だけ……学校同じかな？」

シャロ「そ、そうみたいです……私は一年生です」

リゼ「私とこいつは二年生なんだ。良かったらたよりにしてくれ！」

コウ「ま、俺はこの前転校してきたから、似たようなもんだな」

シャロ「分かりました、それじゃありがたいがとうございました！」

リゼ「ああ、また学校でなー！」

第四羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女 — 2 —

「高校のクラス」

「ガヤガヤガヤガヤ」

「やあやあどうも、久しぶり」

「え？メタいつて？いやいやそんなことよりまず…」

「コウ」 「どうしてこうなった…？って言うか助けてくれ——！！」

第四羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女 — 2 —

少し前に遡って…クラスの前で…

はあ…流石に緊張するなあ…

男もあんまり居ないらしいし、更には……

先生「えつと、このクラスに転校生がやってきまーす！

そしてですねー、まなんと、男の子でーす！」

キヤーー！

生徒「先生！その人ってどんな人ですか？」

先生「んーと、凄くかっこよかったですよ」

キヤーー！！

先生ツ！無駄にハードルを上げるのは止めてくんないかな？

入りづらくなるツ………！！

先生「それじゃあ、入ってきてくださいーい」

………はあ、あんまり自己紹介とかやりたくないんだがなあ…

ガラガラ

コウ「えつと…今日からこの学校でお世話になる 桂樹 紅です

よろしく願います」

シーン

えっ…なんかやらかした!?

生徒1 「やつと…やつとうちのクラスにも男子が来たわよ!」

生徒2 「しかも見て!あの人すっごいイケメンだよ!」

生徒3 「私は…私はこの日のために生きてきたようなもんよ!」

うん…一つ言わせてくれないかな?

なあにこれえ(遊戯風)

——回想終了——

先生 「えっと、それじゃあコウ君の席は窓際ね」

そういつて先生が指差したのは丁度リゼの隣だった

あつ、凄く今更だけどリゼとおんなじクラスなのか

少しは安心出来たなア…全く知らない人ばかりとか嫌だからな—

コウ 「よう、リゼ。」

リゼ「まさかこんな騒ぎになるとはな…」ニガワライ

コウ「全くだ、つてかこんなもんなのか？ここつて」

リゼ「まあ、大体はそうだな。良かったな、しばらくは大人気だぞ？」

コウ「言つとけよ…」

なーんてことをしばらく話していると…

先生「それじゃあ、一時間目は特にやることないんでコウ君への質問タイムにでもしましようか？」

Why!?

いやいやいや、待てまず俺はそんなに沢山の人と話すのは得意じゃないんだ

それにさ、見ろよあの目

完全に獲物を見る目だよ!?

なんで俺そんなに狙われるんだよ!!

そんなことで止める筈もなく…

先生「それじゃあ、皆さんどうぞー♪」

ガタガタツ！

コウ「……………」(ちよつとりゼさん助けてもらっていいですかね?)

リゼ「……………」(無理だ、観念してそのくらい受け入れろ)

コウ「アアアアアアアアツ！不幸だああああああああ!!」

生徒1「コウ君ってどこに住んでいるの?」

コウ「クロロリクパヴエっていう喫茶店です」

生徒2「得意なこととかある?」

コウ「お菓子作りとか、ゲームが得意だよ」

まあ、他にも得意なことはあるんだが別に言う必要ないよね!

A H A H A H A H

A☆

生徒1・2「コウ君って彼女いる!?!」

コウ「イナイデスヨ」

クラス中『キャーキャーキャーッ!』

何てことを聞くんですかねえ………

年齢||彼女いない歴だよ？

なんでそんなことを聞きたいんだよ？

コウ「早く終わらないかな……」

ちなみに、今日は午前中だけで終了です

——帰宅中——

コウ「つ、疲れた……」

リゼ「質問攻めがほぼ一時間続いたもんな……」

コウ「今回で、あそこは話が大好きな人が多いって分かったね」

リゼ「まあそうだな」

コウ「ま、まだ話しやすくて良かったよ」

リゼ「うちの学校にどんなイメーヂ持ってたんだ……？」

コウ「えー？なんかマンガでありそうなようなお嬢様とかいっぱい居そうだなって  
…」

リゼ「そんな奴はいないと思うから安心しろ」

コウ「そりやまあ、リゼがこんな感じだから大丈夫だろ」

リゼ「おい、こんな感じってどういう意味だ？」

コウ「……………」；

リゼ「おい、だまりこむなよ！」

いやだって、本気で殴られそうだもん…………

コウ「つと、俺は家についたけど、リゼはラビットハウスいくのか？」

リゼ「ああ、それじゃあ、また明日」

コウ「おう！明日もよろしくな！」

カラーンカラーン

コウ「ただいまー」

みる「お帰り…お兄ちゃん」

コウ「おつ、みる、ただいま。学校はどうだった？」

みる「楽しかったよ……？」

コウ「そうか、良かったな」

みる「チノちゃんのおかげで友達もできたよ」

コウ「へえ……凄いな、お前人見知りだから全然話しかけないのに……」

みる「ボクだつて成長してるんだよ……？」

コウ「そうかそうか」ナデナデ

みる「〜♪」

ノエル「よお、コウ。帰ってきてたのか。ちよつと頼みがあるんだが……」

コウ「ん？なんだよ？」

ドサツ

コウ「なにこれ？」

ノエル「ラビットハウスに持っていくコーヒーゼリーとか、あとケーキとかだな

これ持つていつてくんないか？

午後だから少し多めに持つてかないといけないけど、こつちも忙しいんだよな……」

コウ「ハア、つたく分かったよ。持つていけば良いんだな？」

ノエル「おう、頼んだぞ〜」

みる「ボクも手伝う……」

コウ「サンキュ、みる」

——ラビットハウス——

カランコロソ

コウ「よーっす、クローリクからのお届けものでーす」

チノ「あつ、コウさん、それにみるさんも」

みる「ん、ケーキとか持ってきた」

チノ「分かりました、それじゃあ、こっちの冷蔵庫に入れてください」

コウ「りよーかい。よいしよつと…」

みる「これもよろしく…」

コウ「はいはいつと…」

チノ「わざわざ持ってきてもらってありがとうございます」

リゼ「なんだ、お前も来たのか」

コウ「よっ、リゼ。さっきぶり」

みる「お兄ちゃん、この人誰…?」

コウ「クラスメイトのリゼだ。」

リゼ「よろしくな」

みる「…よろしく……」

リゼ「な、なんか機嫌悪いのか？」

コウ「きにすんな、大体こんな感じだから」

カランコロソ

ココア「ただいまー！あ、皆来てたんだ！」

コウ「お、お帰り」

チノ「お帰りなさいココアさん、学校はどうでした？」

ココア「ビクッ

コウ「？」

ココア「こ、この町って素敵なお建物がいっぱいあるよね！」

急になにを言いつ出すんだこいつ…

聞かれてる事と違うじゃんか…

チノ「？そうですか、それで学校はどうでした？」

ココア「ま、まるでお人形さんの町みたいだよね！」

コウ「チョットナニイッテンノカワカンナイ」

えつと…学校についてココアが話したがらないってことは多分ないから…

ココア、学校に行っていないのか？

そう言えば…ココアと同じ学校の制服を見てないな…  
と、言うことは…

コウ「ココア、お前今日学校無かつたんだな!？」

ココア「い、言わないで！」

チノ「コウさんよく分かりましたね」

コウ「なんとなく、そんな気がしたからさ」

リゼ「ココアらしいな」

コウ「そうだな」

ココア「うー…」

つたく…

まあ、明日からも学校はあるし頑張らないとな

ま、慣れていくしかないかねー

## 第五羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女

あー、今日も疲れたなあ…

まだまだ慣れないところもあるし…

んで、このあと接客とかしないといけないのか…

きつっいな、ホント…

ま、お給料貰ってるからしようがないね（適當）

その時、スマホに着信が来た

コウ「ん？誰からだ…？なんだ、ココアか

えつと…なんだって…？

パンを作るから良かったら来て？」

いきなりだな、パン作りとか

まあ、行きますがね！

第五羽 紅茶を愛した少年と少年を愛した少女 — 3 —

—— パン作り当日 ——

よし、用意はできたし、店の準備も手伝った！（4時起き）

よし、それじゃあ、行くk

みる「お兄ちゃん…どこ行くの…？」

杏「あらく、お出かけかしら？」

…また面倒なのに捕まったなあ…

コウ「別に、一緒にパン作らないかって言われたから行くだけだよ…」

杏「へえ、コウちゃんあんまりそんなのしないのにねえ」

コウ「そんなことはないはずだが??」

みる「だって、お兄ちゃんと今仲が良い人達と数カ月経ってから遊んでたでしょ…？」  
ぐ…言い返せないのがつらい…ッ！

コウ「…そんなに珍しいか？」

杏 みる「「うん、珍しい（わね）」

はあ…酷いなあ、もう

コウ「はいはい、そんなわけで行ってくるから」

杏「あ、じゃあコウちゃん？」

コウ「なんだよ…？」

杏「私も付いていくわ」

コウ「はい？」

コウ「つてなわけで、これが俺の姉の杏だ」

杏「よろしくねえ〜♪」

チノ「あ、はい。よろしくお願いします」

コウ「んで、チノちゃん。他のメンバーはどこいったの？」

チノ「リゼさんは今から来て、ココアさんは友達を連れてくるそうです」

コウ「流石だなあ…」

もう友達つくってんのか：

まあ、俺に会ったときも凄くフレンドリーだったし、そうゆう奴って本当に居るんだなーって：

俺なんて、学校に友達って呼べるのなんてリゼ位しか居ないか…？  
まだ学校にいるっていう男子も見たことないしなあ：

リゼ「よう、コウ。もう来てたのか」

コウ「オツス、リゼ。お前の方が早かったな」

リゼ「まあな、ところでそっちの人は？」

コウ「ああ、俺の姉の杏だ」

杏「コウちゃんがお世話になってるみたいね〜これからよろしくねえ」

リゼ「あ、ああ。よろしく」

リゼ（なあ、コウ。何かお前と姉違いすぎじゃないか？）

コウ（まあなあ…あれ、ブラコンだからしょうがない）

ココア「ただいまー！」

コウ「よう、ココア。お前パン作りなんて出来るのか？」

ココア「ふっふっふー、実は私の家はパン屋さんなんだよー！」

コウ「へー、それでなのか。ん？後ろにいるのって…」

千夜「あらー、コウ君じゃない。」

コウ「よう千夜。もしかしてココアの友達って…」

ココア「千夜ちゃんのことだよ！」

コウ「そうか、えつとこつちが俺の姉の杏だ」

杏「よろしくねえ、千夜ちゃん」

千夜「こちらこそ、よろしくね」

杏「フフツ、気が合いそうねえ♪」

千夜「そうね♪」

や、やばい…

何がかは分らんがこのふたりは合わせたらダメなやつだコレ…ツ！

リゼ「それにしても…ココアがパン作れるなんて意外だったなあ…」

コウ「そうだな…」

言つつちや悪いが…ココアってそう言うの出来なさそうだもんなあ…

ココア「えっへへー」

チノ「褒められてないと思いますよ」

ココア「さあみんな！パン作りを始めるよー！

パン作りをなめちやいけないよ！少しのミスが完成度を分ける戦いなんだからね！

コウ「おっ、おう…」

戦いって…

まあ、言わんとする事は分かるんだよなあ…クリスマスシーズンになると親父が居なくなつたっけ…（少し違う）

あ、戦いって言つたらリゼが反応するんじや!?

リゼ「こ、ココアが珍しく燃えている…このオーラ…まるで歴戦の戦士のようだ！

今日はお前に教官を任せました！よろしく頼むぞ？」

コウ「リゼ、お前もちよいちよい変なこと言うよな…」

ココア「サーイエツサー！」

千夜「私も仲間によー！」

杏「じゃあ私も♪」

チノ「暑苦しいです」

コウ「この辺に松岡さんでも居るのか？オイ」

ココア「各自、パンに入れる材料を提出ー！」

リゼ「イエッサー！」

千夜「さー！」

杏「いえっさー！」

コウ「仲良いな、お前ら……」

つーか、ここは軍人が集まつてる訳じゃ無いんだからさあ……

暑苦しいのは止めて頂きたい！

ココア「私は、新規開拓で焼きそばパンならぬ焼きうどんパンを作るよー！」

千夜「私は、自家製小豆に梅干しと海苔を持ってきたわ」

チノ「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆と、あとゴマ昆布がありました」

杏「あらく、私は持つてくるの忘れちゃったわ……だから皆のを使用せて貰おうかしら  
」

リゼ「コレって……パン作りだよな？ 私はイチゴジャムとマーマレードだが……」

コウ「その筈だぞ？ 俺はカスタードクリームと紅茶の茶葉だ」

もうさ、この材料使つてお昼作ろうよ。絶対その方が美味しく頂けるって……」

ココア「まずは、生地作りだよ！

強力粉と、ドライイーストを入れて…」

チノ「ドライイーストってパンをふつくらさせるんだよね？」

ココア「そうだよ！チノちゃん凄いね！乾燥させた酵母菌なんだよ！」

チノ「攻防菌…？」

そ、そんなのを入れるくらいならパサパサなパンで我慢します！」

コウ「チノちゃん、違うからね？危険なものでもないからね？」

パンケーキとかにも使うしな…

チノ「パンをこねるのって凄く力が要るんですね…」

千夜「腕が…もう動かないわ…」

コウ「手伝おうか？」

千夜「ここで折れたら武士の恥ぜよ！負ける訳にはいかんきん!!」

コウ「お、おう…」

杏「コウちゃん、なら私を手伝ってくれないかしら？」

コウ「姉さんは絶対はまだまだ余裕あるだろ？」

杏「なーんだ、バレてたのかあ…」

チノ「リゼさんとコウさんはまだ余裕ありそうですね」

リゼ「何故決めつけた？」

コウ「まあ…手で泡立てないといけない事とかあるしな…

あと、リゼについては同意する」

リゼ「なんだと！」

コウ「うお、あつぶね！

わ、分かったよ…悪かったって…手伝うからさ…」

そう言つて、俺はリゼのパン生地をこね始めた

リゼ「わ、悪いな…」／／／

コウ「良いつて、自分で始めたことだしな」

杏 千夜「「ほほう…」」

コウ「その二人、その目を止めろ」

ココア「そろそろ良いかなあ…もちもちしてて凄く可愛い！」

千夜「生地が？」

チノ「凄い愛です…」

杏「やっぱりココアちゃんって面白いわねえ」

ココア「後は、一時間ほど寝かせまーす」

コウ「そうか…」

あーやべえ…今日は特に早起きしたから寝みい…

あ、だめだこれ…暖かくて寝ちやう…

コウ「zzzz…」

リゼ「あれ、寝てる…」

杏「あら〜寝ちやった？コウちゃんなかなか起きないのよねえ…」

リゼ「へえ…寝てる時こんな顔してるんだな…」

チノ「笑ってますね」

ココア「なんだか私達も眠くなってきちやうね」

リゼ「ココアは良く寝てるだろ？」

ココア「うっ…」

千夜「どんな夢見てるのかしらねえ」

ココア「そうだ！私、千夜ちゃんに見せたいものがあるんだー！」

千夜「あら？何かしら〜」

杏「私も気になるわあ」

リゼ「…ありがとうな、コウ」

コウ「…んあ？」

えーと、寝ちやったのか…？

あれ…上着掛けてあるっぽいな…姉さんが掛けたのか？

リゼ「お、起きたか」

コウ「あー、リゼか…」

ココア「あ！コウ君起きた！」

杏「おはよう、コウちゃん」

コウ「んー、おはよ…」

チノ「なんか、反応がおかしくありませんか？」

杏「寝起きはいつもあんな感じなのよ、それがすつごく良いの！」

チノ「そ、そうなんですか…」

…目が冴えてきた

はあ、コレばかりはどうにもならんなあ…

コウ「さて、次はなんだ？」

ココア「次は、パンの形作りだよ！」

コウ「形か…」

俺は…決めた、これにしよう

コウ「チノちゃんは何にするの？」

チノ「おじいちゃんです。昔から尊敬してましたから」

コウ「おじいちゃんっこだったんだな…」

うちのじいちゃんはどこにいるんだか…

チノ「ではこれから、おじいちゃんを焼きます」

ティツピー「!? ノオーーーーーー!!!!」

コウ「チノちゃん! その言い方だと誤解を生むから止めようか!」

ココア「これなら看板メニューにできるね!」

千夜「この梅干しパン!」

ココア「この焼きうどんパン!」

チノ「焦げたおじいちゃん…」

杏「このカレーパン！」

コウ「俺はクリームパンと紅茶の茶葉を混ぜこんだパンだが…

ちよつと姉さん待とうか？何処からカレーなんて持ってきたんだよ!？」

杏「さつき、少しだけ作ったの♪」

コウ「オイオイ、人の家の物を勝手に使うなよ…」

リゼ「というか、コウと杏さん以外食欲をそそらないぞ…」

ココア「ジャーン！実は、ティツピーパンも作ってたんだー!」

コウ「へえ、これなら良さそうじゃないか？」

千夜「まあ！可愛い!」

リゼ「看板メニューはこれで良さそうだな!」

杏「あらうちも看板メニューが要るかしら…」

コウ「さらつと不安になるから止めてくれ…」

千夜「食べてみましょう？」

チノ「もちもちしてる…!」

ココア「えへへー、美味しく出来るといいんだけど…」

チノ「はむ…」

千夜「わあ!」

ココア「リゼちゃんを持つてきたイチゴジャムを使ったんだよ？美味しいね！」  
リゼ「けどなあ……」

杏「これは……ちよつと……」

コウ「食ベにくい……な……」

結局、イチゴジャムは却下され、カスタードクリームやチョコクリームになったそう

な

つか、上着は誰が掛けてくれたんだろう……？

まあ、そのうち聞いてみるか

ふふっ、コウちゃんったら♪

また女の子一人……いや、”昔の約束”を入れたら二人かしら？

コウちゃんっつて人気ねえ……

やっぱり、自慢の弟だわ！

## if羽 リゼとのクリスマス

12/24

クリスマスイブ クリスマスマーケットにて

コウサイド

コウ「はあ…寒っ」

俺は今、クリスマスマーケットである人を待っている

去年とかなら

『はあ？クリスマスだあ!?!パーティーするだけだろイチャイチャすんじやねえ!』

とか思ってるんだろうなあ…

ま、今でも信じられないけどな

リゼ「おーい!コウ、お待たせ!」

おっと、やっと来たか…

コウ「よう、リゼ。メリークリスマス」

リゼ「あ、ああ。メリークリスマス」

コウ「それにしても、遅かったなあ…すげえ寒かったんだけど…」

リゼ「すまない…じゃなくて！そこは『まあ、良いけど』位は言えよ！」

コウ「まあ、良いけど（棒）」

リゼ「くッ！」／／／

コウ「おっと！照れ隠しで殴りかかんな！」

リゼ「て、照れてない！」

コウ「それじゃ、行くか」

リゼ「ああ」

リゼサイド

…今年が初めてなんだよな…こいつと一緒にのクリスマスは…

去年までの私は全く想像何てしてなかっただろうな…

リゼ「それにしても、人が多いな…」

コウ「このクリスマスマーケットは有名だからなあ…

おい、大丈夫か？はぐれるなよ？」

リゼ「わ、分かってるって…ってうわ！」

全く…って、コウは何処だ!?

コウ「だから言っただろ…」

リゼ「ヒヤッ！」

こ、こいついつの間後ろに！

コウ「ハア…つたく、行くぞ」ギユツ

リゼ「ええ!?!」／／／

こ、こいついきなり…

コウ「あ、悪い。嫌だったか？」

リゼ「い、いや!?!別に!?!」／／／

コウ「?そうか、まあ嫌になったら言えよ?」

リゼ「あ、ああ」

そ、そうだよな!?!

これは別に人が多いからであって…

コウサイド

?何だつたんだ?

まあ良いか、それよりクリスマスを楽しまなくちやな

リゼ「コウ」

コウ「ん?なんだ?」

リゼ「これ、可愛くないか!？」

コウ「ふむ…」

ウサギのぬいぐるみか…

でもなあ…

コウ「お前、ウサギのぬいぐるみ持つてなかったか？」

リゼ「…ムスー…」

あー…そう言うことね…

コウ「分かったよ、すいませーん」

店員「はい」

コウ「このぬいぐるみと、これもお願いします」

リゼ「良いのか!？」

店員「分かりました、あら？」

コウ「どうかしましたか？」

店員「お二人はカップルなんですか!？」

コウ リゼ「「ぶっ」／／／

なんでこの人はいきなりそんなことを…!

ってか、やめて? みんなして視線を向けるのは!!

店員「うふふ、それじゃあ2000円になります。」

コウ「はい、どうぞ」

店員「ありがとうございます」

はあ、恥ずかしいと思ったらありやしない…

コウ「悪いな、リゼ。嫌だったろ？ああいうの」

リゼ「た、大丈夫だだだ。も、もも問題ない」

コウ「いや問題しかねえだろ…それ…」

さて、そろそろ良い時間かなあ…

おつ、これ良いんじゃないか？

コウ「ちよつと待っててくれ

すみませーん」

リゼサイド

もう、こんな時間か…

そろそろ帰らなきゃな…

コウ「ちよつと着いてきてくれ」

リゼ「？それは良いが、何処へ行くんだ？」

コウ「それは、着いてからののお楽しみって事で」  
別に、コウと居る時間が長くなるから良いが：／／

リゼ「凄いな、こんな場所があったなんて」

コウ「ふっふっふー…俺のとおきのおきの場所だったりするんだよなー、ここ」  
リゼ「そうなのか」

コウが連れて来てくれたのは、木組みの町が一望出来て、しかも星のよく見える丘だ  
きれいだな…

コウ「そうだ、これ」

リゼ「ん？」

コウ「ウサギのぬいぐるみだよ」

リゼ「あの時、お前色ちがいのやつ買ってただろ…？」

コウ「あ、バレた？」

リゼ「バレルに決まってるだろ！」

コウ「ははは、とりあえずどうぞ。クリスマスプレゼントな？」

リゼ「ありがとう…」

中を開けると青っぽい色をしたウサギのぬいぐるみと…

リゼ「箱？」

コウ「開けてみ？」

リゼ「うん………これって!？」

コウ「気に入るかなー? って思ってたさ」

箱の中にはハートの形をしたペンダントが入っていた

リゼ「…ありがとう」／／／

コウ「どういたしまして」

しかし…

私、何も買ってないんだよな…

いやこれは…恥ずかしいが…

コウにもいろいろしてもらったし、良いよな

リゼ「なあ、コウ」

コウ「ん? どうした…」

チュツ

コウ「え…」

コウサイド

.....

はっ!

いかんいかん、思考停止してた……

よし、整理しよう

今何された?

キスされた

何処に?

口に

Q. これはどういう事ですか説明しなさい

A. リゼさん何してるんですかねえ……口付けとか!?

リゼ「な、なにか言えよ……私だって恥ずかしいんだから」／／／

コウ「いやいやいや、ならするなよ!」／／／

リゼ「仕方ないだろう!?!お礼したかったんだから!」

コウ「それはそれは……ありがとうございます」

リゼ「なんでお礼を……」

コウ「良いだろ、さて帰るか、覗き見してる人達も居るしな?」

ギクツ

リゼ「なっ!？」

ノエル「いやー、ちょうど丘を登るのが見えたからさ……」

リゼ父「偶然一緒に居たから……な？」

コウ「んな訳ねえだろ、買い物の中から居たよなあ！」

ノエル「あー、そこまでバレてたとは……」

リゼ「親父ーッ！」

リゼ父「わ、悪かったって、謝るから許してくれ！」

リゼ「問答無用！早く帰るぞ！」

リゼ父「リゼく、悪かったって〜」

………

まあ、とりあえず

コウ「帰るか……」

あ、バカ親はちゃんと絞めたぜ

## 第六羽 紅の世界 — 1 —

カランカラン

コウ「いらつしやいませ。つと、金剛さんか」

金剛「H e y ! コウサン、今日もキマシター！」

コウ「それはそれは、常連さんになりそうですね」

金剛「もう常連デース！」

この人は、うちによく来てくれる金剛さん

どうやら帰国子女で、四人姉妹らしいけど……

あ、実は同じ学校だったりする

コウ「ご注文をどうぞ」

金剛「ムムム……今日は春なのに暑いデスからネ……

アールグレイかデインブラのアイスティーにしましょうカネ。

後は、日替わりのケーキを一つ」

コウ「それなら、ディンブラのいいやつが入ったのでそれにしますか？」

金剛「任せるネー！」

コウ「かしこまりました…」

コウ「お待たせ致しました、ご注文はすべてお揃いですか？」

金剛「オツケーネ！」

コウ「それでは、ごゆっくり」

金剛「ところでコウサン」

コウ「はい？」

金剛「何故かコウサンって、仕事の時と普段は全然違いまセンカ？」

コウ「ん？わざとだよ…姉とか父にそう言われてるからな」

金剛「そうなんデスネー…」

コウ「そうなんだよな…」

コウ「ありがとうございます！」

金剛「美味しかったヨ！またくるネー！」

コウ「お待ちしております」

コウ「ふー、取り敢えず俺の仕事の時間は終わりかな？」

杏「コウちゃんコウちゃん？」

コウ「なんだよ？」

杏「千夜ちゃんから電話が来てるわよ」

コウ「ん？千夜から？何の用だ…？」

千夜『もしもし、コウ君？』

コウ「よう、千夜。何の用だ？」

千夜『あのね、ココアちゃん達にも言っただけけれど

パン作りでお世話になったから家の喫茶店に招待しようと思って！』

コウ「へえ…面白そうだな。

今からいくよ」

千夜『フフ、お待ちしてるわね♪』

コウ「ここか…千夜の家って。

それにしても…合わねえ…」

千夜の家の周りは外国っぽい街並みなのに、

ポツンと和風のやつがあるんだからな…

看板も左からじゃなくて、右から読むようになってるし

コウ「こんにちは」

千夜「あ、いらっしやい！コウ君だけ？」

コウ「ああ。ココアたちは？」

千夜「まだ来てないわ」

カランカラン♪

ココア「こんにちはー！ってコウ君も来てたんだー！」

コウ「よう、三人とも」

チノ「コウさんも千夜さんに誘われたんですか？」

コウ「まあな、ちょうど仕事も終わつたし」

ココア「そう言えば、あのようかん美味しかったよ！

三本も行けちゃった！」

リゼ「三本丸ごと食つたのか!？」

コウ「なんだそりや…ケーキホールごと食うみたいだな…」

チノ「居るんですか？そんな人…」

コウ「居るんだよな、それもあり合いに」

リゼ「えっ!？」

九ノ瀬さん…本当に良く食べるんだよな…

ココア「あ、うさぎだ!」

千夜「看板うさぎのあんこよ」

コウ「え?こいつ生きてる?全然動かないけど…」

リゼ「確かに置物みたいだな…」

千夜「あんこはよっぼどのことがない限り動かないのよね」

あんこ「!」ピクッ

コウ「ん?」

あんこ「♪」ドゴッ

ココア「ティツピー!」

コウ「チノちゃん大丈夫か!？」

チノ「ええ…びつくりしました…」

コウ「にしても…なんでティツピーに体当たりしたんだ？」

リゼ「縄張り意識が働いたのか？」

千夜「いいえ…あれはきつと一目惚れしたのよ！」

コウ「は？」

千夜はいきなり何を言い出すの？

千夜「恥ずかしがり屋君だったのに…あの目は本気ね…っ！」

ココア「あれ？ティツピーってメスなの？」

チノ「そうですね。（中身は違いますが…）」

コウ（ドンマイ…じいさん………）

ティツピー「あああああああああ………っ！」

あんこ「♪」

千夜「そう言えば、抹茶ラテでラテアートを作ってみたの」

リゼ「へえ、どんなのだ？」

ココア「気になる！」

千夜「ココアちゃん達みたいな可愛いのは描けないけど…」

北斎様に憧れていて…」

ココア「浮世絵!？」

また地味に上手いし…

千夜「俳句をたしなんでいて…」

《ココアちゃん

どうして今日は

おさげやきん？

千夜》

ココア「風流だ!」

リゼ「えっ、季語は?」

コウ「ココア、風流ってちゃんと意味分かって言ってる?」

ココア「大丈夫だよ! たぶん…」

チノ「たぶん!？」

ああ、ココアって国語とか苦手なんだろうなあ…

コウ「それで、メニューはどんなのなんだ?」

千夜「はい、お品書きよ」

パラッ

コウ「なあにこれえ?」

リゼ「なんか…マンガの必殺技みたいだな…」

チノ「どんな物が出てくるのか全然分かりません…」

ココア「わー！抹茶パフェもいいし、クリームあんみつ、白玉ぜんざいも捨てがたいな♪」

コウ「え、これがわかんのか？」

チノ「多分千夜さんとココアさんは感性が似てるんです」

千夜「じゃあちよつと待っててね〜」

コウ「全くワケわからなかった…」

ココアに翻訳してもらわなきゃ全然わかんねえ…

ココア「それにしても、和服って良いよね！

おしとやかな感じがして」

コウ「そうだな、でもなココア。

お前じゃおしとやかには見えんと思うぞ？」

ココア「ひどい！」

俺らは普段を見るからな…

リゼ「……………」ジーツ

チノ「リゼさん、着てみたいんですか？」

リゼ「!?いらつ、別にそう言う訳じゃ……………」

コウ「あー、いいんじゃない？」

リゼ、スタイル良いし。

あ、勿論チノちゃんも似合うと思うけどね？

ココア「うんうん！リゼちゃんならきつと似合うよ！

こう…時代劇とかで博打をしてる女の人みたい！」

リゼ「そっち!？」

コウ「その発想は無かった」

たまげたなあ…

まさかそんな事を思っているとは…